

新学部長に聞く ― 廣石忠司経営学部長／矢野建一文学部長

室井義雄経済学部長は再任

任期満了に伴う経済学部長、経営学部長、文学部長の改選が各学部教授会で終わり、経営学部長に廣石忠司教授、文学部長に矢野建一教授が新たに選任された。任期は本年9月1日から2年間。室井義雄経済学部長は再任された。

■ 廣石忠司経営学部長

「自分だけの専門」持つ 理論と実戦の融合を推進

「社会で輝くチカラを育てる」をキーワードに07年度から新カリキュラムがスタート。

「ビジネスの現場で即戦力となる人材育成のため、『テーマ制』を取り入れ、少人数制の双方向型演習科目を充実させたことが最大の特徴です。『専修大学経営学部でコレを学びました』と胸を張って言える学生を育てたい」とカリキュラム改革の中心人物として語る。



「『ビジネス研究』の科目では、ビジネス領域の問題を発見し、解決するためのプレゼンテーションを行うのですが、複数の教員による講義のほか、経営者や現場の管理職などの実務家と共同で行うコラボ授業なども企画しています。教員同士の緊張感も生まれ、ダイナミックなビジネスの実際を学ぶことができるようになります」

さらに、他学部在先駆けて導入した「インターンシップ」の充実、ボランティア活動など自ら企画・立案した内容を実行することで単位が取得できる「自主活動報告」といった科目で「問題発見・課題解決」能力を高める仕組みが整えられている。

「1年次では必修科目7科目で、学ぶ内容の全体像をとらえます。2年次に興味のあるテーマを選び、3年次で理論と知識を深め、4年次で集大成の卒論を仕上げることで、『会社を興したい』『会社でこんなことをやってみたい』といった一人ひとりの思いに応える教育を実現していきます。『理論と実践の融合』という学部コンセプトを推進し、仮にゼミナールに入っていないなくても『自分だけの専門分野』を持って卒業できます」と語る。

社会に対する情報発信においても今年度は『地域と大学を結ぶセミナー』で、高校生を対象としたコンテストを開催するなど常に進化し続ける経営学部。「大学では覚えることが勉強ではありません。自分の頭で『考える』ことが嫌いでなければ当学部で学ぶ素養があります」。

企業における人事労務の実務経験を生かし、就職指導委員会委員時代には、模擬面接を数多く担当した。「専大生は素直ですが、力があってもそれを100%発揮しきれず、もったいない限りです。『やればできる』という自信を持ってほしい」と呼びかける。

専門は労務管理、労働法。一橋大学法学部卒業。慶應義塾大学大学院経営管理研究科後期博士課程単位取得退学。1996年本学助教授、2001年教授。趣味は、鉄道旅行、秘湯めぐりなど。神奈川県出身。50歳。

■ 矢野建一文学部長

人間性探り自分を知る 専門性と「学際」共に充実

今年、創立40周年を迎えた文学部では、草創期からキメ細かな少人数教育が



行われてきた。6年前から専攻制を導入し、4学科6専攻3コースに。さらにテーマ学習を開始。充実したカリキュラム編成のもと専門性を深める方向と、学科・コースにこだわらず学際的に学ぶ方向の双方の体制が確立された。

「文学部は、数年しかもたないスペシャリストを目指す学部ではなく、“人生の実学”を学ぶ場。人間とは何かを探り、おのれを知ることによって活躍の世界を広げていく。4年間で自分が鮮明に浮き立つよう努力してほしい」と学生に語っている。

文学部のさらなる特徴は、生涯教育を意識した公開講座などをいち早く実施し、社会への「知の発信」を積極的に行ってきたことだ。学部創設以来の歴史を持つ「文学部公開講座」は、今年、40周年記念として内外の伝統と創造をテーマに規模を広げて行う。

日本の伝統文化を国際的視野で考える、日本文学文化専攻のインターネットを用いてのリアルタイム共同授業は4年目を

迎え、新しいスタイルでの「知の発信」として定着しつつある。専門教育においては、文科省オープン・リサーチ・センター整備事業に採択されたプロジェクト2件（「フランス革命と日本・アジアの近代化」と「Anglo-Saxon語の継承と変容」）を展開中。今夏には高校をターゲットに、生徒と教員のそれぞれに英語講座、研究プログラムを実施し好評を博した。

「『40年』を節目に、これまでの成果と反省の上に立って、新たな学部の発展へどう取り組んでいくか。私に与えられた課題です。改革の道は平坦ではありませんが、学生がより深く、より広く学ぶための条件を整えていきたい。もちろん、学問の魅力の発信にも力を尽くします」

文学部3期生で人文学科歴史学コースに学んだ。専門は日本の古代史、宗教史。宗教が日本の政治、経済、文化に与えた影響を探る。話題を呼んだ遣唐使「井真成」墓誌共同研究プロジェクトでは、日本側代表を務め墓誌をめぐる謎に迫った。

「歴史を『鏡』にする」を心に留めている。「正しく向き合って自身の見識を磨く。時には自分の外に鏡を置いて多面的に映すことを心がける。そこからおのずと進む方向が見えてくるのです」。

立教大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。1992年本学助教授。98年教授。趣味は読書（ミステリー）。長野県出身。57歳。

日本会計研究学会全国大会

1120人が参加

日本会計研究学会の「第65回全国大会・公開記念講演会」(記念講演会のみ専修大学後援)が9月5日から8日までの4日間、神田キャンパスほかで開かれ、1120人が参加し、155人が報告を行った。

今大会には、韓国から7人が参加したほか、会社法の神田秀樹東大教授の招待報告、記念講演に島田精一住宅金融公庫総裁を招いたことも特記される。本学では櫻井通晴経営学部教授が準備委員長、渋谷武夫商学部教授が記念講演会で司会を務めるなど、学会員26人が運営に協力した。

6日にホテルグランドパレスで開かれた懇親会には、本学から日高義博学長も出席し、あいさつを述べた。



▲記念講演会で講演する武田隆二・前日本会計研究学会会長(左)と島田精一・住宅金融公庫総裁

06年度「相馬学術奨励基金」海外研究員

杉田博 石巻専大助教授に

相馬勝夫元総長(故人)の寄付を基に本学出身の若手研究者の海外派遣等を目的に設けられた「相馬学術奨励基金」の06年度研究員に杉田博石巻専修大学経営学部助教授が選ばれ、9月から1年間、米サスケハナ大学で「20世紀初頭におけるアメリカ経営学の哲学的基礎」をテーマとする研究・調査を行う。

杉田助教授は、1993年専修大学経営学部卒業、95年大学院経営学研究科修士課程修了、99年明治学院大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学。同年石巻専修大学経営学部講師、2002年助教授。